

三一新書 304

霧のなかの歌

第一部 消される人たち

村 上 信 彦 著

三 一 書 房

村 上 信 彦
むら かみ のぶ ひこ

1909年 東京に生まる

著 書 『服装の歴史』全三巻（理論社）

『紺の制服』（三一新書）『音高く流れぬ』

全四部（三一新書）他

現住所 東京都南多摩郡多摩村関戸1513

霧のなかの歌 第一部

定 価 150 円

1961 年 7 月 10 日 第1版発行

著 者 © 村 上 信 彦
1961年

発 行 者 田 畑 弘

印 刷 所 誠和印刷株式会社

製 本 所 永 井 製 本 所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電話東京(201)9581~5番

振替東京84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 304

霧のなかの歌

第一部 消される人たち

村上信彦 著

三一書房

第一部

消される人たち

雨上りの空は灰色の雲で埋まり、はげしく西に流れていた。湿った夜気は裸電球の周囲を白い靄でつつみ、光線の縞を溶かして揺れ動いていた。

なだらかにみえたアスファルトの校庭には意外に窪みがあつて、ところどころに水溜りができ、黒い沼のようにひっそりしている。五分前まで地下足袋やズックの靴で蹴散らされ、よごれたしぶきをあげていたのが、いまはかたい地面の大きな穴がひろがっているばかりだ。だれもその空間にはいつてゆこうとしない。三百名あまりの第二国民兵は、周辺をとりまく闇のなかに文字どおりへばりついている。校舎の窓の下を細長く区切った花壇の木柵のあたり、便所への通路、雨天体操場の前、校舎の階段、下駄箱の附近など、教官達と電燈の光から遠い地点に散らばっている。暗い人影の間にときどきマッチの火が閃くが、おどろくほどの白さで闇を切り裂いては消える。宙に浮かんだタバコの火はうす赤く、よわよわしく動き、位置の移動を知らせた。だが大半は塀によりかかったり、うずくまっていた。

話し声が洩れるが、ほとんど低くて聞き取れない。だれもが「こんなときに話すことはない」

と言わぬばかりに無愛想だった。自分のことばかり考えていた。短い会話は始まるとすぐ終わった。ただおなじ隣組や顔見知りのものだけがひとかたまりになり、意味のない笑い声を響かせたが、それも永くはつづかなかった。闇のなかでべつのかを感じ、言葉とうらはらの想いに耽っているのを、て、れているようだった。共通しているのはただ一刻も早く時間がたってこのあざとい義務に別れを告げ、校門を出るや否やいままでの一切を忘却にたたきこみ、明るい灯のついた我が家の玄関でゲートルを解き、家族と馬鹿口の一つもたたいてから久方ぶりの配給のビールをのみ、「これで役目も終わった。ああ、自由ってなんていいんだろう！」としみじみ独りごちることである。

相馬春吉の空想もそこにあった。だが彼の場合にはそれ以外の重苦しいものが胸にひっかかっていた（彼は無視するようにつとめているのだが）。よこれた服——しかも昨日までは一張羅の服だ。

相馬春吉が国民服をつくったのは、回覧板で第二国民兵の軍事訓練が始まることを知ってからずっと後のことである。便利で経済だという触れこみにかかわらず、軍服の代用品として通しているカーキ色の服を彼は好かなかった。あるいは畏怖していた。着込んだだけでなに一つの、身動きならない型に鑄込まれる気がした。それはビヤホールでジョッキの一杯に家庭の煩わしさを忘れたり、会社の会計係の女の子にかるい冗談口をたたいたり、フランス映画の

主題歌を口ずさんだりする気分とはおよそ縁遠いものだった。ところが、しだいに街に国民服が氾濫しはじめ、その連中がジョッキを傾けたりタイピストをからかったりするのがすこしも不自然に見えなくなると、彼の心境も一変して、国民服の嫌悪が薄らいだばかりでなく、むしろ心底から欲しくなったのである。

春吉は会社に入りの洋服屋——それも最近は出入りしなくなったのだが——をたずねて、たった五着分しか残っていない純毛と称する布地を見せてもらい、八十円で新調した。八十円は彼の月給の一月分に近い。彼はその計算をけっして忘れず、（これでも市価の二割安ですよ。申し込みはたくさんあるんだが、お宅の会社とは特別の関係だから……）という言葉をかたく信じて疑わなかった。この経済感情はしだいに他の心理を圧倒して、やがて緑色がかった純毛の服は着馴れた背広の地位を押しつけ、宴会や公式の機会に着る「第一装」にのし上がった。ズボンの折目はいつもぴんと保っていたし、たまに着ればかならずブラシをかけてたむのである。だから一年以上たった今日でも新調同様だった。そしてそのことが、自分が昭和五年度の第二国民兵であり、今年はいよいよ近くの国民学校で四日間の軍事訓練を受けねばならぬという通知を在郷軍人会から受けとったときの悩みの種になった。平生のグレイの背広はもう三年も着くたびれているし、そのまえに作った合着は方々にビールのしみなどがついている代物だから、着て出るものがなくはないのだが、訓練に国民服は通り相場となっている。相馬

春吉は自分ひとりがネクタイをしめて視線の的になる光景を想像すると、どうしても古い背広を着る勇気が出なかった。日ごろ順応主義を苦々しく思い、輕蔑さえ感じていながら、いざとなると決心がつかねた。思い悩んだ末に第一装の国民服を着ることになったのであるが、さて集まりに出てみると、けっして多くはないが、背広にネクタイの男も幾人があることがわかった。いまだき国民服を持たぬものはなからうから、かれらは自分で選んで背広を着てきたにそういない。だとすればなにも苦勞することはなかった。しまったと思ったときはあとの祭だった。なぜなら相馬春吉にとっては、一度国民服で出た以上、こんどは途中で背広に着換えることに周囲の眼が——とくに教官の眼が——はばかられるからである。

訓練がはじまってから三日間、真新しい国民服が最初に心配したほどの被害もなくてすんだのは、彼の細心の注意が効を奏したからであつた。われ勝ちに木銃を取らねばならぬときにも、できるだけ汚れの少ないのを選ぶだけの機敏さを發揮したし、休憩時間にもアスファルトに腰をおろしたり古い板塀に寄りかからぬように気をくばってきた。ところがせっかくのそうした努力が、いよいよ最後の今日という日に水泡に帰したのだから諦められないのである。文字どおり天災の雨が、それも土砂降りの雨が、数分たたぬうちに彼の一張羅を上から下まで水浸しにしてしまった。しかもその災難を待ちかまえたように「匍匐前進！」の号令が落ちてきた。相馬春吉は自分の耳を疑った。なんのために、いま腹這いになって前進しなければならな

いのか？理由はない。ただ一人で突っ立っているわけにはいかなかった。

運のわるいことに眼の前に避けることのできない大きな水溜りがあった。彼は絶望的に、身投げでもするような格好でからだを倒した。びしゃつと勇ましい音がして、飛沫が顔にかかった。あとはやけだった。肱と膝でみじめにもがき、蛇のように身体をのたくらせた。前列の男の地下足袋のうすぎたない裏底が鼻さきに揺れている。揺れることに泥の溶けた水がアスファルトを走って彼の顔の前に掻き寄せられる。それを眺めながら、尚かつ停止していないことを示すために、彼はいっそうのろのろとみじめにのたくるほかはないのである。「やめえ」の号令がかかってやっと起き上がったとき、新調第一装の国民服は胸と言わず腹と言わず、膝から足までみごとに汚れきっていた。

休憩が与えられ、だれよりも早く黒い物蔭にうずくまった彼の身体は陰鬱な怒りに燃えていた。つめたい感触はシャツを透して肌に浸みついている。洗濯に出したら相当取られるだろうと考える。（これが実戦的というのかよ、畜生！）と胸の中で叫んでいた。（わざわざ選りに選って雨の中を這いずらせやがって、そんな「気分」が一体なんの役に立つというんだ。今どき買えない服を汚すほうがどれだけ国力の損耗になるか知れやしない）しかも雨は通り雨だった。まるで三百人の国民兵を泥水にのたくらせるのが目的であったかのように、いまは急速に晴れ上がりつつあった。白い蒸気が電球の下で渦巻いていた。

濡れた服は身体を動かすと冷たかった。彼はじっとしているのに耐えられなくなって立ち上がった。手が無意識に上衣のボタンをはずし、内ポケットをさぐった。つぶれた「ほうよく」の箱から抜き取った一本は奇跡のように乾いていた。彼はあたりを見回した。

「だれか、マッチを貸してくれないか」

だまって一人がマッチをさし出した。擦ると、おどろくほど大きな音がして、硫黄の匂いが強く流れた。

相馬春吉は何か言いたくてたまらなくなった。暗闇が彼を大胆にした。

「いま、何時頃かしらんねえ」

「もう九時半、……いや、十時近いでしょう。なにしろ時計が見えなくって」

女のように細くてやさしい声は、（こいつ、お人好しなんだな）と思わせるに十分だった。

相馬春吉はこういう人間を見つけたのがうれしかった。この四日間、だれもが荒々しく無愛想なのに少しばかり圧迫を感じていたのである。

「ずいぶん遅いんだな。どうだろう、まだこれから訓練をやるのかね」

彼は思いきって馴れ馴れしく話しかけた。

「さあねえ」と相手は歌うような声で応じた。「これから集まって、訓示があつて、散会でしよう」

「そうだろうね、なにしろ遅すぎる」

「すぐ散会ですよ」

ふたりは黙った。しずかな夜気と湿気を感じると、さっきまでの土砂降りと、悲壮な気分に駆り立てられた匍匐前進とが信じがたいもののように思われた。

「いったい、どうしてあんな真似をさせるんだろうね、君」

「何を」

「匍匐前進さ」

「それがどうしたんです」

「だってさ、わざわざ雨の降っている最中にやらなくてもよさそうなものじゃないか。時と場合を考えないにも程がある。だれだって服を汚したくはないものね」

かすかな笑い声が洩れた。

「訓練だからしかたがない」と相手はつぶやいた。

「そんなことを気にしていたんじゃ、訓練にはならんでしよう。雨は好きなきに降るんだし、戦争は……」

「いや、そりゃ分かってるさ、その通りなんだ」と彼はいそいで口を入れた。「戦争と天気が別なくらい、そりゃあ知ってるよ。だけどだね、泥だらけになるのはなにも練習しなくても、

いざとなれば誰でもやることなんだ。それを経験するのが実戦的というのはどうかね。まあ、僕に言わせりゃ……」

しゃがんでいた三四人が立ち上がった。彼の話に耳を傾けている様子だった。それに気がつくのと、彼はいそいで口をつぐんだ。

暗くて表情は掴めなかったが、声だけは卑屈なほど優しい相手が自分の気持ちに乗ってこないのが分ると、相馬春吉はたちまち落ち着きを失った。それはいつもの彼の癖で、意見の一致しない人間からは圧迫を感じるのである。沈黙がその徴候だった。周囲の注目を惹いたことも好ましくなかった。これ以上しゃべるのは危険のような気がした。だが途中で切れた言葉は宙に浮かんだままで、捨てておけば始末に終えない不自然なものにふくらみそうだった。彼は立てつづけに煙草をすった。

突然、「なにッ！」という罵声と平手打ちの音が、腹の底に沁みわたった。かれらのいる位置と反対の校庭の一角で起こったみじかい鋭い音はほとんど間近に聞こえた。すると、ひっそりしていたあちこちの暗い物蔭から、たちまち動揺が起こった。「何だ」「どうしたんだ」と叫び出した。つづいて無数のざわめきが、足音が、四方から校庭に崩れこんだ。裸電球の照らし出す白っぽい夜気のなかを、黒い人影が入り乱れて走りはじめた。

相馬春吉はあわてて投げた煙草を踏みじると、いそいであとを追った。かれらに追いつ

き、荒々しい肩と肩の間にもぐりこむことで、またもとの意志をもたない群集の一人になろうとつとめた。

2

門から校庭にはいるすぐ右側に机が二脚ならび、受付と筆太に大書した紙片が誰の眼にもつくようにぶらさけてある。第二国民兵達は命ぜられた四日間、日が落ちるところにやってくる、まずこの机の前に列をつくって、召集令状の一片を切りはなした参会証をさし出し、一日の訓練が終わると第何日目の欄に捺印したそれを受けとって帰る。この紙切れは在郷軍人として必要な任務を果たした証明書であると同時に、夏に行なわれる簡閲点呼や、すでに始まっている出征のときにも欠くべからざる奉公袋の中の必携品目の一つとされている。だから訓練にはどうしても出なければならぬ。受付の机に向かって事務をとっているのは春吉もよく知っている薬局の若主人である。色白の男で、愛嬌も商才も持っている。白い壁を小さく切り取って飾り窓にしたり、風邪薬や胃腸薬を調剤して店名を刷りこんだ封筒に入れて売ったり、時間ぎめで売る煙草——彼は煙草も商った——をお得意にこっそり融通したりした。だがこの店が評判

になったのは、結婚したばかりの美しい妻と一緒に店先へ出て愛嬌をふりまくためだった。彼も第二国民兵で訓練の義務があるのに受付の事務を引き受けてお茶を濁していられるのは、やはり商才のおかげだという噂であった。受付の仕事は最初と終わりの三十分ほどで、訓練中は何もせずにぼんやり見物していればいいのだ。休憩中の教官たちがその机の附近にたむろするのも、椅子に腰かけて休めるからであるが、それだけで彼は教官たちと同格のようにみえた。罵声と平手打ちの音はそこで起こったのである。

暗い物蔭から詰め寄せてきた第二国民兵達はやや遠巻きに半円形をえがいて、固唾かたずをのんでいた。机に向かっているのは第二小隊長の石橋上等兵で、痩せた長い顔は怒りのために蒼白になっていた。軍帽の下に光る細い眼は吊り上がり、興奮で口唇が震えている。正面には、彼のあらゆる憎悪と怒りの対象になっている一人の国民兵が、背中を観衆にむけてぼんやり立っていた。彼は自分をなぐった教官よりずっと老けており、撫肩で、猫背で、首を前に突き出していた。うす汚れた国民服や、長い首の上のカーキ色の帽子は借着のように身についていない。ただ奇妙なのは、直立不動の姿勢をとってはいるものの、腕を両脇に垂らすかわりに後ろ手に組み、重ね合わせた親指を上へやったり下へやったりして遊んでいることであつた。

「なんだい、人をばかにしやがって！」

金属性の高い声で、石橋上等兵は叫んだ。

「社会的たあなんだ。ここをどこだと思ってるんだ」

言うたびに頬に血が上るが、すぐにまた蒼白になる。興奮を抑えきれないのか、机の上で握りしめた両の拳がときどき動いた。

他の教官は五六歩離れたところにかたまって、事の成り行きを見守っていた。椅子に掛けているものも、樹にもたれて煙草をすっているものもいた。何か他のことに気を取られていると言わんばかりに、ポケットをなでまわしたり、胸のボタンに手をやったりしていた。あるものは空を仰いでいた。ある教官は敵意のまなざしで、集まった観衆をじろじろ見渡していた。が、共通しているのは一様に陰鬱な表情だった。

「おい、何とか言え！ 言ったらどうだ」

沈黙がつづく耐えきれぬようにまた上等兵はどなった。前よりも甲高い声がつんと夜空を衝く。

「ちえっ、軍隊だったらばなあ」

「軍隊だったら、どうなるんです」

はじめて低い声が応じた。背中の筋肉がかすかに動いて、戯れていた親指がじっと止まった。「なにを、この野郎！」

叫んだかと思うと、石橋上等兵は椅子をうしろに蹴って立ち上がった。